

## 【海事図書館事業】

令和6年度も昨年度同様、図書の閲覧・複写の他レファレンス等の利用者サービスを充実させた。

### 利用者の利便性の向上

- (1) 利用者が必要な情報や資料にアクセスしやすいように、サインの充実を図った。また、国立国会図書館が全国の図書館と協同で構築している「レファレンス協同データベース」に登録している過去のレファレンス事例について、事例数・内容等の充実を図った。
- (2) 海事関係図書・資料の整備・充実化を図った。
- (3) 新刊情報、図書館の利用案内等について、SNSの活用を含め情報発信の充実を図った。
- (4) 劣化しやすい新聞を中心に、図書・資料のデジタル化を推進した。
- (5) 2・3階の書庫資料の利用を促進するため、8階閲覧室内で図書のテーマ展示を実施し、年4回展示替えを行った。
- (6) 以前実施していた「利用者アンケート調査」を新たな視点から実施し、利用者のニーズを把握するとともに、資料・情報提供サービス等の向上を図った。

### 利用状況等について

1. 図書館参考資料1(2024年度利用者状況調査)
2. 図書館参考資料2(2024年度購入資料(単行書・雑誌・逐次刊行物))
3. 図書館参考資料3(2024年度レファレンス事例紹介)



テーマ展示：太平洋戦争と商船



## 2024年度 利用状況調査

年月	開館 日数 (日)	入館者数 (名)	入館者数 1日平均 (名)	電話・ メール等 問合せ数 (名)	利用者数 合計 (名)	利用者数 1日平均 (名)	利用者 カード 新規 作成数 (名)	レファレンス 件数 (件)	内ILL (冊)	図書雑誌 貸出冊数 (冊)	コピー 枚数 (枚)	コピー 件数 (件)	HP ページ ビュー 数 (件)	メルマガ 配信数 (通)	Twitter ツイート 閲覧数 (件)	Twitter フォロー ワー数 (名)	
2024年4月	21	89 (13)	4.2 (0.6)	21 (0)	110 (13)	5.2 (0.6)	21	20	2	59 (8)	887	83	2,588	2,384	1,093	440	
2024年5月	21	74 (21)	3.5 (1.0)	16 (0)	90 (21)	4.3 (1.0)	8	17	1	37 (10)	1,219	50	2,149	2,400	1,959	446	
2024年6月	20	74 (15)	3.7 (0.8)	15 (1)	89 (16)	4.5 (0.8)	14	14	5	34 (15)	398	40	2,224	2,458	4,807	453	
2024年7月	22	71 (6)	3.2 (0.3)	25 (0)	96 (6)	4.4 (0.3)	19	22	4	19 (5)	397	52	2,367	2,507	16,953	517	
2024年8月	20	82 (9)	4.1 (0.5)	20 (1)	102 (10)	5.1 (0.5)	21	17	4	35 (9)	372	39	2,441	2,542	11,593	574	
2024年9月	19	63 (9)	3.3 (0.5)	14 (1)	77 (10)	4.1 (0.5)	12	13	2	41 (9)	466	46	2,055	2,583	2,855	583	
2024年10月	22	70 (19)	3.2 (0.9)	15 (2)	85 (21)	3.9 (1.0)	7	26	4	26 (14)	575	51	2,146	2,599	2,253	582	
2024年11月	20	68 (16)	3.4 (0.8)	20 (0)	88 (16)	4.4 (0.8)	13	20	5	32 (10)	513	41	2,079	2,609	2,314	595	
2024年12月	19	74 (20)	3.9 (1.1)	12 (1)	86 (21)	4.5 (1.1)	12	10	1	54 (25)	371	46	1,906	2,614	3,914	609	
2025年1月	19	80 (18)	4.2 (0.9)	12 (1)	92 (19)	4.8 (1.0)	18	12	0	39 (14)	491	55	2,648	2,633	8,337	632	
2025年2月	18	70 (19)	3.9 (1.1)	10 (0)	80 (19)	4.4 (1.1)	11	10	3	29 (17)	414	39	2,092	2,635	7,613	643	
2025年3月	20	69 (18)	3.5 (0.9)	15 (0)	84 (18)	4.2 (0.9)	12	12	0	33 (6)	404	36	1,836	2,635	3,930	655	
2024年度 合計	241	884 (183)	3.7 (0.8)	195 (7)	1,079 (190)	4.5 (0.8)	168	193	31	438 (142)	6,507	578	26,531	30,599	67,621	6,729	
前年度合計	239	831 (137)	3.5 (0.6)	215 (11)	1,046 (148)	4.4 (0.6)	162	211	40	400 (112)	7,585	588	28,327	26,628	68,585	4,336	
前年度比 増減	101%	106%	134%	105%	132%	102%	127%	103%	128%	103%	128%	102%	127%	102%	127%	102%	127%

※入館者数、入館者数1日平均、電話・メール等問合せ数、利用者数合計、利用者数1日平均、貸出冊数の()内の数値は、日本海事センター職員の利用数(内数)である。

## 2024年度 購入図書一覧

## 単行書

タイトル	著者	出版者
私の新みなと観	雨宮洋司	22世紀アート
ばら積み船の運用実務	関根博監修 酒井明彦, 亀田義則, 山本恵太著	成山堂書店
港湾知識のABC 13訂版	池田宗雄, 恩田登志夫	成山堂書店
東アジアの港湾と貿易	男澤智治, 合田浩之	成山堂書店
環境と港湾 CNPによる日本港湾の復権にむけて	森隆行	海文堂出版
海と国際法	柳井俊二編	信山社
日本遺産 二つの港物語 関門“ノスタルジック”海峡	堀雅昭	UBE出版
地球の歩き方 御船印でめぐる船旅	地球の歩き方編集室	地球の歩き方
2024年海上人命安全条約	国土交通省海事局安全政策課監修	海文堂出版
現代物流産業論 ロジスティクス・プラットフォーム革新	林克彦	流通経済大学出版会
港湾で活躍する人材の育成	奥田美都子, 柴原優治	成山堂書店
消えた航跡 58社の客船たちの活躍と終焉	小松健一郎	南の風社
Rによるデータ分析入門	松浦寿幸	東京図書
2024年海上人命安全条約附属コード集 (英和対訳)	国土交通省海事局安全政策課監修	海文堂出版
さんふらわあで船旅を楽しむ	ジーウォーク	ジーウォーク
国家の総力	兼原信克, 高見澤将林	新潮社
鈴与グループ代表・鈴木与平の変化対応し続けてこそ!	村田博文	財界研究所
改訂版受渡実務マニュアル 輸出編	オーシャンコマース	オーシャンコマース
クレーム処理の手順と事例集	オーシャンコマース	オーシャンコマース
業種別会計シリーズ海運業 改訂版	EY新日本有限責任監査法人編	第一法規出版
地方創生の政策効果とデータ分析 Excelで初歩から学ぶ	土居英二	日本評論社
地域公共交通政策論 第2版	宿利正史, 軸丸真二	東京大学出版会
船舶金融論 船舶に関する金融・経営・法の体系 3訂版	木原知己	海文堂出版
日本の海洋法制度の展望 (現代海洋法の潮流 5)	坂本茂樹, 植木俊哉, 西本健太郎編	有信堂高文社
日本の内航海運と事故防止 事業者の安全への取組と国の制度	竹本七海	法律文化社
多様なリスクへの法的対応と民事責任	大塚直, 米村滋人編著	商事法務
グローバル・ロジスティクスの基礎	魚住和宏, 石原伸志, 合田浩之, 石原祐介【編著】	成山堂書店
名古屋港を語る	工藤彰三編著 麻生太郎, 高橋治朗著	中央公論事業出版
やさしくわかるエネルギー地政学 ~エネルギーを使いつづけるために知っておきたいこと~	小野崎正樹, 奥山真司	技術評論社
国際政治経済学 第2版	田所昌幸, 相良祥之	名古屋大学出版会
家計と世界情勢の関係がまるわかり! 暮らしと物価の地政学	小山堅監修	ナツメ社
静かな基隆港 埠頭労働者たちの昼と夜	魏明毅 黒羽夏彦訳	みすず書房
グローバルサプライチェーン再考 経済安保、ビジネスと人権、脱炭素が迫る変革	若松勇, 箱崎大, 藪恭兵編著	文眞堂
講座 情報法の未来をひらく AI時代の新論点 第7巻 安全保障	山本龍彦監修 石井由梨佳編	法律文化社
米国海運100年の変遷 アメリカン・プレジデント・ラインズと先駆者たち	ジョン・ニーヴェン 山本裕訳	中央経済社

## 2024年度 購入図書一覧

## 雑誌

タイトル	出版者	刊行頻度
Container age	コンテナエージ社	月刊
COMPASS	海事プレス社	隔月刊
CRUISE	海事プレス社	季刊
フォーリン・アフェアーズ・レポート	フォーリン・アフェアーズ・ジャパン	月刊
海事法研究会誌	日本海運集会所	季刊
海運	日本海運集会所	月刊
海運経済研究	日本海運経済学会	年刊
航運交易公報	上海航運交易公報出版社	週刊
港湾	日本港湾協会	月刊
内航海運	内航ジャーナル	月刊
荷主と輸送	オーシャンコマース	月刊
世界の艦船	海人社	月刊
運輸政策研究	運輸総合研究所	年刊
運輸と経済	交通経済研究所	月刊
China intelligence monthly	Clarkson Research Studies	月刊
Container freight rate insight	Drewry Shipping Consultants	月刊
Container intelligence monthly	Clarkson Research Studies	月刊
Dry bulk trades outlook	Clarkson Research Studies	月刊
International bulk journal	Glenbuck Pub.	隔月刊
Journal of Commerce	IHS Markit	隔週刊
KP data	海事プレス社	季刊
Oil and tanker trade outlook	Clarkson Research Studies	月刊
Shipping intelligence weekly	Clarkson Research Studies	週刊
Shipping review & outlook	Clarkson Research Studies	半年刊
Shipping statistics and market review	Institute of Shipping Economics and Logistics	月刊
World shipyard monitor	Clarkson Research Studies	月刊

## 2024年度 購入図書一覧

## 逐次刊行物

タイトル	著者	出版者
中国物流発展報告	中国物流与採購聯合会	中国物資出版社
中国航運発展報告	中華人民共和國交通部	人民交通出版社
船の便覧	内航ジャーナル	内航ジャーナル
ガス年鑑	テックスレポート	テックスレポート
現行海事法令集	現行海事法令集編集委員会編 国土交通省 監修	海文堂出版
海上定期便ガイド	内航ジャーナル	内航ジャーナル
海運・造船会社要覧	海事プレス社	海事プレス社
国際物流事業者要覧	オーシャンコマース	オーシャンコマース
国際輸送ハンドブック	オーシャンコマース	オーシャンコマース
交通学研究	日本交通学会	日本交通学会
港運事業者要覧	日本海事新聞社	日本海事新聞社
L P ガス資料年報	石油化学新聞社	石油化学新聞社
内航海運データ集	内航ジャーナル	内航ジャーナル
日本におけるコンテナクレーン一覽表	港湾荷役システム協会	港湾荷役システム協会
世界のコンテナ港とターミナルオペレーターの現状	大阪港振興協会, 大阪港埠頭株式会社	大阪港振興協会
石炭統計	テックスレポート	テックスレポート
数字でみる物流	物流問題研究会	日本物流団体連合会
数字でみる港湾	国土交通省港湾局編	日本港湾協会
鉄鋼統計要覧	日本鉄鋼連盟	日本鉄鋼連盟
The bulk carrier register	Clarkson Research Studies	Clarkson Research Studies
The chemical tanker register	Clarkson Research Studies	Clarkson Research Studies
The containership register	Clarkson Research Studies	Clarkson Research Studies
The gas carrier register	Clarkson Research Studies	Clarkson Research Studies
Guide	ShipPax Information	ShipPax Information
Lloyd's Register of Shipping: Register of ships	IHS Markit	IHS Markit
The reefer register	Clarkson Research Studies	Clarkson Research Studies
Shipping statistics yearbook	Institute of Shipping Economics and Logistics	Institute of Shipping Economics and Logistics
The tanker register	Clarkson Research Studies	Clarkson Research Studies

**2024** 年度における

海事図書館のレファレンス事例紹介

冷蔵・冷凍コンテナが開発される前、冷蔵が必要な貨物（植物や食品等）を在来型貨物船にどのように積んで輸出されていたかを調べている。

具体的には明治・大正から戦前にかけて、日本から欧米に輸出されていた盆栽が貨物船のどこに載せられていたのか知りたい。（現在も輸出されているが、現在は冷蔵コンテナに積載されていることを知っている。）

船の設計図があるとなお良い。少しあとの時代でも良い。コンテナ船が主流になる 1960 年より以前の、冷蔵設備のある貨物船の設計図があれば見たい。

造船会社や当時輸送にあっていた日本郵船の歴史博物館にも問い合わせたがわからなかった。

盆栽の輸送について書かれたものは見当たらなかったが、冷蔵・冷凍の肉の輸送について書かれた、1912 年発行の洋書がある。

"A history of the frozen meat trade: an account of the development and present day methods of preparation, transport, and marketing of frozen and chilled meats"

著者 Critchell, James Troubridge : Raymond, Joseph

出版社 Constable

出版年 1912

オーストラリア・ニュージーランドからヨーロッパまで冷蔵・冷凍の肉を船で輸送する際の、陸上での冷凍方法や船での保冷方法などが書かれている。

絵も多数掲載されており、その多くは関係する人物の肖像画だが、当時冷凍肉の輸送に使われた船の外観や、船の内部の配置図（貨物室の場所も描かれている）、冷蔵の仕組みを図で描いたものなどもある。

他には、1948 年から 2001 年まで発行されていた月刊雑誌「船の科学」（船舶技術協会）に、新しく竣工した船の設計図が掲載されている。

その中に、1960 年代建造の冷蔵貨物船、冷蔵運搬船の設計図があった。

現在、この雑誌は日本船舶海洋工学会の Web サイトで全て見られるようになっている。当館でも所蔵しており、閲覧が可能。

冷蔵貨物船 / こすたりか丸 1968 年 9 月号 44 ページ

<http://zousen-siryokan.com/wp/wp-content/uploads/item/funenokagaku/funenokagaku-vol21-09.pdf>

冷蔵運搬船 / あさかぜ丸 1968 年 5 月号 58 ページ

<http://zousen-siryokan.com/wp/wp-content/uploads/item/funenokagaku/funenokagaku-vol21-05.pdf>

冷蔵運搬船 / 第三十九号大盛丸 1969年3月号 69ページ

<http://zousen-siryokan.com/wp/wp-content/uploads/item/funenokagaku/funenokagaku-vol22-03.pdf>

また、当館には所蔵がないが、以下の図書も参考になりそうである。

「冷蔵と人間の歴史：古代ペルシアの地下水路から、物流革命、エアコン、人体冷凍保存まで」

トム・ジャクソン 著, 片岡夏実 訳 築地書館 2021.9

<https://www.tsukiji-shokan.co.jp/mokuroku/ISBN978-4-8067-1624-2.html>

目次によると、天然氷そのものを船で輸送することや、冷蔵船についても触れられているようだ。

天然氷の輸送や、氷を使った冷蔵船については Wikipedia に詳しく書かれていた。こちらでも参考になると思われる。

Wikipedia 氷貿易

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B0%B7%E8%B2%BF%E6%98%93>

#### レファレンス事例：002

明治期にハワイ移民に行った人物の調査をしている。

「明治32年(1899)10月5日に神戸港を出発。ロシア船でカリフォルニア経由でホノルル入り。22日にホノルル港着」との情報があり、当時は北米定期航路が就航していたため、日本郵船のシアトル線か東洋汽船のサンフランシスコ線を利用したことが考えられる。

については以下の事項が知りたい。

①乗船した船名と航路、出港時間。

②ロシア船籍の船が神戸港からホノルルへ就航していたのか。

③乗船の際に乗船名簿に記載されると思うが、船便の場合、乗船名簿の確認や入国審査はされていたのか。

①②③いずれもはっきりとしたことは分からなかった。

当館には乗船名簿や船の出入港を記録した資料がなく、乗船した船や出港時間などを調べる手立てがない。

日本郵船や東洋汽船の社史等から判明したことは以下の通り。

○日本郵船株式会社「我社各航路ノ沿革」昭和7年

日本郵船の創業から昭和7年まで、運航してきた航路ごとに就航の経緯や就航していた船名、寄港地などが記されている。

これによると、ハワイに寄港していたのはシアトル線で間違いない。

ただ、シアトル線の寄港地名にハワイの地名はなく、明治29年から31年の間、摘要欄に

「船客の都合により往航布哇（ハワイ）に寄港する」とあるのみで、しかも明治 32 年以降はその記述もない。

よって明治 32 年には日本郵船のシアトル線はハワイに寄港していなかった可能性がある。

参考までに、明治 32 年 10 月当時、日本郵船シアトル線で使用されていた 4 隻の船名は以下の通り。

金州丸、和泉丸、旅順丸、土佐丸

#### ○中野英雄著、発行「東洋汽船六十四年の歩み」昭和 39 年

東洋汽船の社史。著者の中野氏は東洋汽船の最後の社長（昭和 35 年に東洋汽船は日本油槽船と合併し消滅）。

これによると、明治 31 年から日本丸、明治 32 年から亜米利加丸、香港丸が太平洋航路に就航しており、往復ともにホノルルに寄港したとのこと。

「其の後十年を経て、布哇（ハワイ）在留邦人は十万人を超えるに至ったが、その大部分が東洋汽船の船で渡航し、或いは往復した」という記述もあり、ハワイ移民には東洋汽船の利用が多かったと見られる。

また、東洋汽船は太平洋航路に就航するにあたり、アメリカの太平洋郵船（Pacific Mail Steamship Company）及び西東洋汽船会社（Occidental and Oriental Steamship）の 2 社と連合したが、この 2 社の船は、往復航のうち 1 回だけハワイに寄港することになっていたとのこと。

従って、この 2 社の運航する船に乗った可能性もあると思われるが、明治 32 年当時、2 社が太平洋航路に使用していた船の名前は判明しなかった。

また、調べた限りではロシア船籍の船は使用されていないようである。

#### ○濱屋雅軌「太平洋郵船と国際交流」開成出版 2009 年

上記の太平洋郵船について書かれた書籍。

この中に、太平洋郵船がシベリア号という船を太平洋航路で使用していたことが書かれている。

ただ、シベリア号は 1902 年（明治 35 年）の建造で明治 32 年当時はまだ存在していない。

#### ○その他

当時の客船の出港時間を調べる方法として、一般の新聞に掲載された出帆広告というものがある。

例) <https://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DImages/Bijutsushi/IShinbun/Picture/00123.jpg>

（東京大学総合研究博物館のデータベースより。大正 7 年のもの。）

神戸港の出帆広告は、神戸の地方紙や全国紙の大阪版などに掲載されていた可能性が高い。

神戸市立図書館や兵庫県立図書館、大阪府立図書館などで当時の新聞を復刻版やデータベースで閲覧できるとと思われる。

川村貞次郎氏について調べている。三井物産の造船部や船舶部で活躍し、その後、船主協会会長などを歴任した人物で、雑誌「海運」2011年1月号（創刊1000号記念号）に詳しくその業績が掲載されている。関連の資料があれば読んでみたい。

以下の資料があった。

1. 川村貞次郎氏について書かれた図書・雑誌記事等

< 図書 >

○「海運千一夜物語」

住田正一著 明玄書房発行 1954年

海運人の手紙 C 川村貞次郎氏の技術尊重 p91-96

○「わが海運六十年」

野村治一良著 国際海運新聞社発行 1955年

川村貞次郎と内田信也 p217-220

○「日本海運ノート 日本における海運の歩みとその時々の経営者を中心に平易に解説」

石川直義著 オーシャンコマース発行 2001年

4章 三井物産船舶部と川村貞次郎 p35-40

○「三井物産株式会社造船部二十年史」

株式会社玉造船所編・発行 1938年

○「三十五年史」

三井造船株式会社編・発行 1953年

< 雑誌記事 >

雑誌「海運」日本海運集会所発行

344号 (1956.5)

海運集会所の創設者、故川村貞次郎氏追悼会 p78~79

852号 (1998.9)

「社史に見る経営者の決断」(2)川村貞次郎のケース 石川直義 p50~51

2. 川村貞次郎氏が書いた雑誌記事

雑誌「神戸海運集会所月報」「海運」

(76号まで「神戸海運集会所月報」、77号から「海運」)

69号 (1928.2) から 146号 (1934.7)まで毎号、論説を掲載。

レファレンス事例：004

昭和 30 年代から 40 年代頃、船で脱脂粉乳を輸入している様子を撮った写真を入手したい。

「報道写真が映す戦後の横浜港 神奈川新聞社創業 125 周年記念」

横浜みなと博物館編・発行 2015 年

上記資料 p.9 に横浜港に脱脂粉乳を荷揚げする写真が掲載されていた。

「アメリカから贈られた脱脂粉乳の陸揚げ」1956（昭和 31）年 10 月 22 日撮影

上記資料は、横浜みなと博物館の企画展の図録であるが、神奈川新聞社創業 125 周年記念の企画展のため、神奈川新聞社が原版を持っている可能性が高い。神奈川新聞社に問い合わせることを勧めた。

レファレンス事例：005

1941 年 7 月 3 日に川南工業香焼島造船所で竣工した「木津川丸」という商船の設計図を探している。

運航会社の社史「東洋海運株式会社二十年史」も参照してみたが、設計図等はなかった。逓信省平時標準船 D 型が近く、川南工業が香焼島造船所で 1937 年から 1941 年までに建造していた船が最も近い型ではないかと推測している。

参考になる文献や資料を教えてください。

木津川丸の設計図は当館資料中に見当たらなかった。

川南工業についての資料は見当たらず、東洋海運の関連資料は「東洋海運株式会社二十年史」の他に下記 2 冊があるが、いずれも設計図は掲載されていない。

「船舶史稿 海運会社 船歴編 第 3 1 巻 新栄船舶 宇和島運輸 日邦汽船」

船舶部会「横浜」船舶史稿編纂チーム編・発行 2018 年

「太平洋戦争に於ける東京船主籍殉難船航跡資料集（其 2）民間船主（タ行）（大東亜海事興業・大東商船・帝國船舶・東海汽船・東邦水産・東洋海運・東洋汽船・巴組汽船・東京籍船主（一般汽船）／東京船籍船主（一般機帆船）」

五十嵐温彦編・発行 2016 年

他に、

「昭和造船史 第 1 巻（戦前・戦時編）」日本造船学会編 原書房発行 1977 年

には船の設計図が多く掲載されているが、その中にも掲載はなかった。

レファレンス事例：006

1920年代後半～1930年代初めの国際航路について調べている。  
具体的には、ハンブルグ発着／リガ発着／レニングラード発着の国際航路の時刻表を確認したいが、そのような情報を調査できる文献はあるか？

当館では時刻表を所蔵しておらず、他にも調査できる文献は見当たらなかった。  
古い時刻表を所蔵する「旅の図書館」を紹介した。当時の時刻表には船の時刻表も載っていると聞いている。

レファレンス事例：007

明治・大正時代に就航していた100トン級の石炭運搬船の写真や絵はないか。

該当の時代の船舶写真が多く載っている資料としては以下のものがある。

「日本近世造船史付図（明治時代）」  
「日本近世造船史付図（大正時代）」  
(いずれも、造船協会編 原書房発行 1973年)

ただし、大型船が中心のため、100トン級の船は掲載がなかった。

当館では写真や絵そのものは所蔵しておらず、書籍に掲載されたもののみである。  
横浜みなと博物館など、博物館に尋ねてみることを勧めた。

レファレンス事例：008

太平洋戦争中に使用された機雷について詳しく説明しているような資料はないか。

以下の書籍に「機械水雷（機雷）」の項目があったので提供した。

「海軍辞典」  
山内大蔵，内田丈一郎編 今日の話題社発行 1985年  
(1942年発行の復刻版)

レファレンス事例：009

**日本郵船の浅間丸に関する資料はあるか。**

以下の6資料がある。

1. 就航90周年記念 客船浅間丸 ～サンフランシスコ航路をゆく～  
日本郵船歴史博物館. -- 日本郵船歴史博物館, 2019/10/05
2. 船長藤田徹 明治・大正・昭和を生きた船乗りの遺した記録  
藤田操. -- 中央公論事業出版, 2016/01/15
3. 神戸客船ものがたり  
森隆行, 五艘みどり. -- 神戸新聞総合出版センター, 2010/11/25
4. ドキュメント豪華客船の悲劇  
竹野弘之. -- 海文堂出版, 2008/05/15
5. 浅間丸事件と日本のマスメディア (近代日本政治資料 13)  
慶應義塾大学法学部政治学科玉井清研究会, 2007/11/22
6. 狂気の手 太平洋の女王浅間丸の生涯  
内藤初穂. -- 中央公論社, 1983"

レファレンス事例：010

以下の客船5隻の図面が欲しい。

レックス、コンテ・ド・サボイア、ノルマンディー、オイローパ、ブレーメン

レックスとコンテ・ド・サボイアについては、下記の本に図面が載っているらしい。所蔵しているか？

タイトル：Rex & Conte Di Savoia

叢書名：Classic liners. Vol.II

著者：Braynard, Frank O.

出版者：American Merchant Marine Museum Foundation 発行年：1994

まず、レックスとコンテ・ド・サボイアについての書籍は当館では所蔵していない。

他に図面が掲載された書籍を探したが、ブレーメン以外は見つけることができなかった。  
ブレーメンについては、以下の書籍に図面があったが横から見た図面のみで、各デッキごとの上から見た図面は掲載がなかった。

タイトル「Die Geschichte der deutschen Passagierschiffahrt. Bd. 4」

著者 Kludas, Arnold 出版者 Ernst Kabel 発行年 1989年

**I am reaching out to inquire about any available information, photographs, or records related to the vessel Ishizuchi (IMO: 7010717). It was built at Kochi Jyuko but is officially documented with Kurushima Dockyard listed as the shipbuilder. The ship was launched on December 10, 1969, and served under the company Shikoku Chuo Ferry Boat from its commissioning until its sale in 1978.**

**I am particularly interested in:**

- Historical photographs of the vessel during its service period.**
- Technical specifications, design plans, or any documentation regarding its construction.**
- Operational history or any notable events involving the vessel.**

**Any assistance, guidance, or referral to other resources or archives would be greatly appreciated.**

<Historical photographs of the vessel during its service period.>

Two photos have been published in the magazine "Fune no Kagaku (Science of Ships)".

You can see them online, website of The Japan Society of Naval Architects and Ocean Engineers.

<https://zousen-shiryokan.jasnaoe.or.jp/wp/wp-content/uploads/item/funenokagaku/funenokagaku-vol46-06.pdf>  
pp.77-78

<Technical specifications, design plans, or any documentation regarding its construction.>

No Data.

<Operational history or any notable events involving the vessel.>

No Data.

Other sources of information on Ishizuchi are probably the shipyard or the previous owner.

According to the book "Kurushima Dock Monogatari (The Story of Kurushima Dockyard)", business situation of Kochi Jyuko deteriorated in 1967 and it became a group company of Kurushima Dockyard.

The current name of the shipyard is Shin Kurushima Kochijyuko Co., Ltd.

<https://www.skj-kk.co.jp/>

The previous owner was Shikoku Chuo Ferry Boat, but it no longer exists, and the related companies went bankrupt in 2001.

レファレンス事例：012

以下の帆船の図面（一般配置図）や写真を探している。

①イタリア帆船アメリカ・ヴェスプッチの図面

②メキシコ帆船クワウテモクの一般配置図、甲板上の写真。

上甲板中央部付近に何かの装備品を取り外した痕跡があり、何があったか調べたい。

①②ともに図面は見つからなかった。写真が掲載されている資料は以下の通り。

①

「Windjammer 写真集・世界の帆船」

桜井隆彦写真 茂在寅男監修 毎日新聞社発行 1976年

※甲板上など様々な場所の艀装の写真があるので参考になるかもしれない。

②

「帆船讚美 '83大阪世界帆船まつり公式記録写真集」

大阪市港湾局編 大阪港振興協会発行 1984年

「白鳥たちがやって来る '83大阪世界帆船まつり公式ガイドブック」

大阪市編 大阪港振興協会発行 1983年

「最新世界の帆船」

中村庸夫著 平凡社発行 1992年

「帆船 海は人の造形物に生命を与えた」

西村慶明著 桜井隆彦写真 マリン企画発行 1983年

レファレンス事例：013

以下の3船に関する資料が見たい。主要目が記載されているものが良い。

ひまわり8（2017年建造）

第六はる丸（2021年建造）

琉球エクスプレス7（2022年建造）

ひまわり8（2017年建造）

COMPASS 2017.11 船の見どころ見せどころ

荷主と輸送 2017.9

日本海事新聞 2017.9.4 2面

第六はる丸（2021年建造）

日本海事新聞 2021.9.22

海事プレス 2021.9.21

琉球エクスプレス7（2022年建造）

日本海事新聞 2022.12.8 2面

海事プレス 2022.12.6

新日本海フェリーの以下3隻について、竣工直後の主要目に関する情報が記載されている雑誌記事があれば見たい。

雑誌「共有船」「海と船のサイエンス」「KANRIN」あたりに掲載されているのではないか。

はまなす（2004年竣工 2004年のシップオブザイヤーを受賞）

らべんだあ（2017年竣工）

あざれあ（2017年竣工）

以下の雑誌記事が見つかった。

なお、「共有船」「海と船のサイエンス」には該当する記事は見当たらなかった。

○はまなす

1. 「国内最大・最速フェリーがデビュー CRP 装備のポッド推進システムを世界初採用  
新日本海フェリー / 三菱重工長崎造船所」 COMPASS 23巻6号（2004.9）
2. 「「シップ・オブ・ザ・イヤー04」が決定」  
COMPASS 24巻6号（2005.9）
3. 「Ship of the Year '04 「はまなす」に決定 準賞に「ぐらばあ」」  
KANRIN 1号（2005.7）
4. 「新船紹介」  
旅客船 229号（2004.8）

○らべんだあ

1. 「船のみどころみせどころ “らべんだあ” 新日本海フェリー/三菱重工業 高速化と省  
エネを両立した最新鋭フェリー」 COMPASS 36巻3号（2017.5）
2. 「新日本海フェリーの「らべんだあ」デビュー！」  
世界の艦船 858号（2017.5）
3. 「新造船「らべんだあ」が就航へ～内覧会初日は横浜大さん橋で～ 新日本海フェリー」  
海運 1075号（2017.4）
4. 「特集 多様化する船旅のかたち 2017年の就航フェリー より“船旅”を追求したデ  
ザインへ」 海運 1086号（2018.3）
5. 「新船紹介」  
旅客船 280号（2017.8）

○あざれあ

1. 「世界最大のコンテナ船“MOL TRUTH”が受賞 シップ・オブ・ザ・イヤー2017」  
COMPASS 37巻5号（2018.9）
2. 「シップ・オブ・ザ・イヤー2017 今年の栄冠は世界最大級2万TEU型コンテナ船に」  
荷主と輸送 523号（2018.5）
3. 「新船紹介」  
旅客船 280号（2017.8）

レファレンス事例：015

広島県福山市における海運や海運組合の歴史についての資料はないか。明治の終わりから大正の初めにかけてのことが知りたい。

調べてみたが、該当の資料は見当たらなかった。

広島県立図書館が「瀬戸内海関係資料所蔵図書目録 船・海運の部」などを発行しており、瀬戸内海の家運に関する資料を多く所蔵しているようなので、そちらに問い合わせることを勧めた。

レファレンス事例：016

船主について調べている。傭船者や運航者ではなく、個人船主などの氏名が分かるような資料はないか。また、その船主の所有船舶のリストがほしい。

現在、当館には船主についてそこまで詳細な資料はない。

オンラインデータベース「Sea-Web」(S&P Global 社)には掲載されていると思われるが、当館では公開していない。

なお、当館の蔵書のうち、船主の所有船舶の一覧が掲載されているものとして、以下の資料がある。ただし、個人船主の氏名などはない。

○「海運・造船会社要覧」海事プレス社発行 年刊

日本企業のみ。各企業ごとに「社船と運航船舶」の項目があり、所有船舶が分かる。

○Clarkson 社発行の各船種別船名録 6 種

「The bulk carrier register」

「The chemical tanker register」

「The containership register」

「The gas carrier register」

「The reefer register」

「The tanker register」

それぞれ該当する種類の船が船名のアルファベット順に掲載されている。

巻末に船主索引があり、該当の船種の所有船舶一覧がある。

○「Lloyd's maritime directory」 Informa 発行

世界の船主や造船所などのダイレクトリー。ただし 2010 年を最後に廃刊した。

レファレンス事例：017

日本国内に拠点を持つ海外船主およびオペレーターに関する資料はないか。

海外船主・オペレーターに限定した資料はないが、以下の資料が参考になる。  
オーシャンコマース発行「国際物流事業者要覧」（年刊）  
海事プレス社発行「海運・造船会社要覧」（年刊）  
いずれも日本の会社がメインだが、海外船社の日本支店なども掲載されている。

レファレンス事例：018

傭船期間の長期化について調べている。1950～70年代頃の、日本籍船の傭船期間が分かる資料はないか。

外国傭船については「海運統計要覧」（日本船主協会）に傭船期間が掲載されているが、日本籍船については傭船期間のデータが見当たらない。

また、傭船期間の長期化についての文献があれば知りたい。

「海運統計要覧」の外国傭船の傭船期間以外には、傭船期間が掲載された資料が見当たらなかった。従って、日本籍船の傭船期間については不明である。

傭船期間の長期化については、以下の2資料にタンカーの傭船期間の長期化を望む意見があった。

1. 中村秀治「タンカー長期傭船に努力すべし」  
雑誌「海運」（日本海運集会所）351号（1956.12）p.31
2. 「座談会 外国タンカーの長期傭船可否論」  
雑誌「海運」（日本海運集会所）395号（1960.8）p.62-67

また、好況時と不況時の傭船状況の比較をした論文もある。傭船期間についても触れているが、外国籍船と日本籍船には分けられていない。

織田政夫「海運企業の用船行動に関する若干の分析」  
海事産業研究所報 205号（1983.7）p.7-23

他に、当館では所蔵していないが、国会図書館の蔵書検索では以下の資料もヒットした。

小堀聡「日本のエネルギー革命：資源小国の近現代」  
名古屋大学出版会 2010.12  
第6章の中に「傭船期間の長期化と自社船の拡充」という項目があるようだ。

レファレンス事例：019

海運業について全体を概観できるような資料はないか。

運航会社と船主の分業について、「海運企業は具体的にどういう業務をしているのか」、「運航会社が船主から傭船する場合は、そのうちの業務部分を引き受けているのか」というようなことを知りたい。

以下の3点が参考になると思われる。

「基礎から学ぶ海運と港湾」

池田良穂著 海文堂出版 2017年

一般向けの入門書で、かなり簡単に（2ページ程度）船主と海運会社について書かれている。

「業種別会計シリーズ海運業 改訂版」

EY新日本有限責任監査法人編 第一法規 2021年

会計実務者向けの図書だが、海運業やビジネスモデル等も詳しく書かれている。

「海運産業構造の研究」

岡庭博著 海文堂出版 1964年

かなり古い本だが、海運産業を概観できるもの。ただし、現状とは合わないかもしれない。

海運業について概観できる資料は少ないため、実際に海運業界で仕事をされていた方などに話を聞くのが早いかもしれない。

レファレンス事例：020

アイスランドの船員資格についての資料はないか。アイスランドと相互協定を結んでいる国のものでもよい。

アイスランドの船員資格についての資料は見当たらなかった。

アイスランドと相互協定を結んでいる国がどこなのか、質問者が把握しておらず、当方でも調べてみたが不明だった。

船員の当直時間について、英語での呼び方を知りたい。

日本語では、深夜0時から4時を泥棒ワッチ、8時から12時を殿様ワッチと呼ぶことがあるが、英語だとどのような呼び方なのか。

特にクルーズ船での呼び方を知りたい。

①の「Watches」の項目に、以下のように書かれていた。

00:00-04:00 Middle Watch (graveyard watch)

04:00-08:00 Morning Watch

08:00-12:00 Forenoon Watch

13:00-16:00 Afternoon Watch

16:00-18:00 First Dog Watch

18:00-20:00 Last Dog Watch

20:00-24:00 First Watch

②の「watch」の項目には、0時から4時の当直がgraveyard watchと呼ばれるようになった経緯が書かれていた。

クルーズ船に限った情報は、③④などを見たが見つからなかった。

【参考資料】

①「海に由来する英語事典」

Jeans, Peter D. 飯島幸人, 丹羽隆子共訳. -- 成山堂書店, 2009

②「海の英語 イギリス海事用語根源 復刻版」

佐波宣平. -- 成山堂書店, 1995

③「目指せ！クルーズアドバイザー 旅行業界人必携の書クルーズ一問一答」

池田良穂, 山田迪生, 沢木泰昭. -- 海事プレス社, 2004

④「クルーズ100問100答 これであなともクルーズ博士」

池田良穂・山田迪生著. -- 海事プレス社, 2000

レファレンス事例：022

クルーズ船の船員に関する資料が見たい。

以下の資料がある。

1. 外航海運企業の人的資源管理 - 船舶乗組員と組織社会化 -  
米澤聡士. -- 文眞堂, 2023/06/30
2. 船で働く人たち (しごと場見学! しごとの現場としくみがわかる!)  
山下久猛. -- ペリかん社, 2013/03/01
3. 船と船乗りの物語  
城島明彦. -- 生活情報センター, 2005/12/20
4. クルーズビジネス論  
池田良穂. -- 船と港編集室, 2010/04/30
5. 基礎から学ぶクルーズビジネス  
池田良穂. -- 海文堂出版, 2018/04/25"

レファレンス事例：023

中国の船用工業について、市場規模や製品の輸出先(国名)が分かる資料はないか。少し古い資料でも良い。

市場規模については、質問者の求める内容に一致するか不明だが、以下の資料で触れられている。

※いずれも日本船用工業会編・発行の資料

「中国船舶工業の発展戦略に関する調査報告書」(2015年)

「中国船舶工業の発展戦略に関する調査 2012年度中国船舶工業12次5カ年計画に基づく市場動向に関する調査」(2013年)

「中国船舶工業第12次5カ年計画の動向に関する調査」(2012年)

「中国における舶用品国産化政策に伴う舶用品市場への影響に関する調査」(2009年)

「中国における船用工業製品の市場構造に関する調査」(2006年)

「中国船舶工業の企業再編に関する調査報告書」(2014年)

「中国船用企業の事業概況に関する調査報告書」(2015年)

「中国船用工業技術力実態調査」(2011年)

輸出先の分かる資料は見当たらなかった。

レファレンス事例：024

**2000年以降（もしくは可能な範囲）の内航船の海外売船数の推移及びその売船先（仕向け国）について調べたい。**

内航船の海外売船数が掲載された資料は見当たらなかった。  
従って、売船先についての資料もない。

売船数、売船先ではないが、内航船の海外売船に関するデータとして、内航ジャーナル発行「内航海運データ集 2024」の中に、「海外売船価格」というグラフ・表が掲載されている。

2008年から2020年の推移だが、データのない年もある。売船例がなかったのか、情報が得られなかったのかは不明。

船種別（一般貨物船、油送船、砂利船、RO船・自動車船）およびサイズ別に掲載され、売船例数と平均価格、船齢が書かれている。

バックナンバーも確認したが、2008年より前のデータは掲載されていなかった。

「内航海運データ集」はCD-ROMの資料で、当館備え付けのパソコンで閲覧が可能。

レファレンス事例：025

**船種別で、船の竣工量や新造船船価が分かる資料はないか。特にクルーズ船（客船全体ではなくクルーズ船のみ）についてわかるものが見たい。**

○船の竣工量

Clarkson「World shipyard monitor」（月刊）に掲載の表「Deliveries by vessel type」でわかる。

Cruise Vesselsという項目があるので、クルーズ船のみの数値も掲載されている。

○新造船船価

クルーズ船のみの船価は見当たらなかった。

上記「World shipyard monitor」に「Shipbuilding price trends」という表があり、各船種の平均価格が掲載されているが、クルーズ船の項目がない。

レファレンス事例：026

**コロナ禍に、船が香港に集中したという話を聞いた。当時のアジア域内での船の動きが分かるような資料はないか。**

コロナ禍のアジア域内での船の動きについては、雑誌「荷主と輸送」に以下の記事があった。

2020年5月号「IAPH-WPSPの最新報告 COVID-19の港湾影響調査 5月に入りオペレーション回復傾向に」

2020年7月号「JILS アンケート調査 国際物流ではコスト上昇や遅延が大きな課題 COVID-19感染拡大の影響をアンケート調査」

2020年9月号「COVID-19の影響はどこまで？ 米中荷動きと主要港取扱量推移」

2020年12月号「貿易戦争、COVID-19に翻弄されたコンテナ市場 日本郵船調査グループが2019～2020年を総括」

2021年3月号「2020年の中国港湾コンテナ取扱量 1.2%増・2.6億TEU、上海港が1位維持」

2021年4月号「2020年のアジア域内・日中航路荷動き コロナ禍も下期のアジア域内は活況 日中は往航で前年並み維持も復航は減少」

他に、2020年から2022年頃の日本海事新聞や海事プレスに関連記事があると思われる。

また、日本海事センターが2022年3月14日に開催した、第1回JMC 海事振興セミナー「新型コロナウイルス感染症の拡大等で大きく変貌するコンテナ船業界」での松田客員研究員の講演資料が参考になる。

<https://www.jpmac.or.jp/img/application/pdf/document07.pdf>

なお、船が香港に集中したということが書かれた資料は見つけれなかったが、上記の資料で良いとのことであった。

レファレンス事例：027

**船舶量と船腹量の使い分けに厳密な定義はあるか。**

海事用語の辞書を数冊見てみたが、船舶量、船腹量どちらも辞書に載っていなかった。

海事関連業界では、船の隻数やトン数を表す場合は船腹量と言い、船舶量と言うことはまずない。

船舶量という言葉は、港に入って来る船の隻数などを表す時に、入港船舶量などと使われる程度である。

レファレンス事例：028

**クルーズ客船の隻数が最も多い国はどこか。船籍ベースで知りたい。**

船籍国別船種別のデータが掲載されている資料としては IHS 「World fleet statistics」があり、クルーズ船の船籍国別のデータも掲載されている。しかし 2020 年版（2020 年末のデータ）を最後に廃刊となっている。

この 2020 年版によると、バハマの 122 隻が最も多い。

より新しいデータとしては、ISL の「Shipping statistics yearbook」があり、現時点での最新版は 2023 年版（2023 年頭のデータ）だが、これに掲載されていたのはクルーズ船以外の客船も含んだ数値のため、クルーズ船だけの数値は分からなかった。

レファレンス事例：029

**タンクコンテナのマーケットについてまとめられた資料はないか。主要プレイヤーや主要荷物、市場シェア、競争環境等が知りたい。**

希望の内容と完全に一致するわけではないが、雑誌「荷主と輸送」掲載記事に以下のものがある。

2023 年 5 月号「世界のタンクコンテナ、コロナ禍で急増 新造は 2 年連続 2 ケタ増も供給過剰懸念」

この中で紹介されている報告書「The shipping industry's fuel choices on the path to net zero」は、マッキンゼー社および Global Maritime Forum のウェブサイトで公開されている。

Global Maritime Forum のウェブサイト

<https://globalmaritimeforum.org/press/survey-suggests-a-multi-fuel-future-for-the-shipping-industry-on-the-path-to/>

2022 年 3 月号「2021 年の世界タンクコンテナ市場 7.8%増の 73 万 9,900 基で、初の 70 万基超」

2021 年 3 月号「タンクコンテナフリート過去最高更新 ITO 調査、2020 年は 5.3%増の 68 万 6,650 基」

上記 2022 年 3 月号、2021 年 3 月号で紹介されているレポート「Global tanker container fleet survey」は国際タンクコンテナ機構のウェブサイトで公開されている。

現在の最新版は 2024 年版。

<https://www.international-tank-container.org/storage/uploads/ITCO-Global-Fleet-Survey-2024.pdf>

レファレンス事例：030

日本海事協会や国交省、船舶品質管理協会において「型式承認」された海上コンテナの仕様に関する資料・文献を探している。

調査した限りでは、国交省並びに船舶品質管理協会による「国土交通省型式承認物件一覧表」があり、Web上で公開されている年度については閲覧済みである。

「国土交通省型式承認物件一覧表」2002年度

<https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/00099/contents/038.htm>

確認したい情報は、承認申請書、試験結果といった書面、型式ごとの仕様(サイズや、ドライ・バルク・リーファといった用途、搭載冷凍機、材質)、及び写真や図面等外観が分かる資料など。文献が存在しない場合、別の問合せ先(メーカー等)があれば教えてほしい。

コンテナの型式承認に関する文献は、当館資料に見当たらなかった。

web上で公表されている「国土交通省型式承認物件一覧表」は、日本船舶品質管理協会から毎年出版されているようだが、当館には所蔵がなかった。

国立国会図書館でも1991年、1996年、2010年、2011年の4冊のみの所蔵のようである。その他の書籍や雑誌も調べたが、掲載はなかった。

上記資料発行元の日本船舶品質管理協会に直接尋ねてみることを勧めた。

レファレンス事例：031

コンテナを船に積載するやり方を説明している書籍はあるか。

積載方法に触れている以下の書籍5点を紹介した。

1. 「国際海上コンテナ輸送概論」  
今井昭夫著 東海大学出版会発行
2. 「MOL JAPAN物流入門」  
株式会社エム・オー・エル・ジャパン物流入門編集委員会編・発行
3. 「港湾荷役のQ & A 改訂増補版」  
港湾荷役機械システム協会編 成山堂書店発行
4. 「港で働く人たち」  
大浦佳代著 ペリかん社発行
5. 「最新版受渡実務マニュアル 輸出編」  
オーシャンコマース編・発行

レファレンス事例：032

貨物の重さの単位について、日本船主協会『海運統計要覧』では「M/T」、輸入貨物輸送協議会『輸入貨物輸送実績』では「K/T」が使われている。

「M/T」はメトリックトン、「K/T」はキロトンのことか。  
また、1K/T=1000 トンと理解しているが、合っているか。

「海運統計要覧」「輸入貨物輸送実績」ともに単位の略号の凡例はなかったが、詳しい者に確認したところ、「M/T」はメトリックトン、「K/T」はキロトンで合っていると思われる。

ただし、1K/T=1000 トンではなく、1K/T=1000kg。

「航海便覧 3 訂版」には、1 metric ton(K/T)=1000kg と書かれており、メトリックトンとキロトンは同じ重さを表す単位と考えられる。

【参考資料】

「航海便覧 3 訂版」 航海便覧編集委員会編 海文堂出版 1991 年

レファレンス事例：033

港や運河の間の距離が何マイルあるか調べられる資料はあるか。たとえば、スエズ運河からドーバー海峡まで何マイルかといったことを調べたい。

また、遠隔地在住なのでそのコピーを送ってもらうことはできるか。

「距離表」を見れば港間や運河間の距離を調べることができる。

ただし、「距離表」には比較的近距離の距離が掲載されており、長距離を調べるには経由地を設定し、掲載された距離を足していく必要がある。

当館ではコピーの郵送サービスを行っているが、経由地の設定をするだけの知識を持たないため、コピーの郵送は難しい。

「距離表」は、発行元の日本水路協会から購入が可能なので、日本水路協会に問い合わせることを勧めた。

【参考資料】

「距離表 平成23年3月刊行」

海上保安庁海洋情報部編 日本水路協会発行 2011 年

※現時点での最新版

レファレンス事例：034

ゴムのサーキュラーエコノミーの一環として、船舶のリサイクル技術を調査している。  
下記のような船舶のリサイクル技術に関する情報についてまとめられた書籍はないか。

- ・寿命を迎えた船舶の処理／処分／再利用などルートについて
- ・船舶に用いられるゴム製品の最終的な処理方法について
- ・船舶のリサイクル技術全般について
- ・リサイクル技術の特徴、またその選定理由について
- ・技術をリサイクルに適用する上での課題について
- ・船舶関係のリサイクル関係の法規制について
- ・サーマルリサイクル（燃料として処分）に対する考え方
- ・船舶のカーボンニュートラルやサーキュラーエコノミーに対する温度感（取り組みの熱量）

当館にはそのような内容の資料は見当たらなかった。

当館は海運経済に関する資料を中心として収集しており、技術書は少ない。

船のリサイクル技術に関しては以下の図書で少々触れられているが、鋼材のリサイクルがメインで、ゴムのリサイクルについては記述がなかった。

「あっと驚く船のリサイクル 船舶再利用のための知られざるプロセス」  
（光人社NF文庫） 大内建二著 光人社発行 2011年

「バングラデシュの船舶リサイクル産業と都市貧困層の形成」  
佐藤彰男著 明石書店発行 2014年

レファレンス事例：035

レインボーブリッジは、客船クイーン・エリザベス2の高さを基準に、橋げたの海面からの高さを決めたと聞いているが、それを証明できるような資料はあるか。

東京港関連の資料などを見てみたが、分からなかった。